日本
ハンザキ研究所ニュース 2007(09): 通巻20号
発行　2007.9.30
〒679-3341兵庫県朝来市生野町黒川 292
TEL/FAX (079)679-2939
E-mail:J-hanken@sasayuri-net.jp
日本ハンザキ研究所　栃本 武良

今年のアンコ淵における繁殖パーティ

アンコ淵に昨年の4月から住み着いている黒主（♂）は、繁殖期になっても好適な産卵巣穴を探索する必要がありません。それは周辺から複数のオス・メスが集まってくるからです。昨年の繁殖パーティは9月13～15日に3オスと1メスで構成されていました。そして、例年より少し遅れ気味の産卵は15日と推定される卵を約2㌔下流に設置された簾野地区の人工巣穴からも得る事ができていました。アンコ淵でも丁度同じ日に産卵があったと考えられましたが、卵の確認はできませんでした。昨年は9月3日（9月第一日曜日）の正午からアユの網漁解禁ということで当ニュースNo.8に紹介したように、アンコ淵に網を入れたグループがあってハンザキの繁殖行動への影響が心配されたのでした。今年は、6月に漁協の総会で学校敷地範囲に接する河川区域を禁漁区にしていただいたのです。お蔭様で、川を覗きにやって来る方々も他の場所へ網を入れる事にされたようで静かな環境を保つことが出来ました。漁協の皆様ありがとうございました。

さて、肝心のハンザキ繁殖パーティのほうですが、今年は昨年の倍となる10個体によるイベントを見ることが出来たのです。まずは、観察ステーションに初入巣で8月18日に確認したオス（No.1031）はチェックした翌日には姿を消していたのですが、2週間後の1日の夜にすぐ近くで採捕できたので遠くへ行ってしまったのではなく、目の前に設置してある「はんざきブロック」内に住み着いていたのだと思います。さらに2日に来客を連れてハンザキ橋からアンコ淵を見おろしつつ説明をしていた時でした。黒主が穴から頭を出しているところへスルスルと近づいてきた個体がいました。昨年の様なスリリングなオス同士のバトルが？と見つめていると、スッと黒主が引っ込み続いてその個体も入っていきました。メスだ！と喜んだのも束の間、数分で出てきてしまい上流に向かって移動し橋の上流側5㍍ほどの所にある“1㍍岩”（水深が1㍍ある）の下に入ってしまいました。小さな穴しかなくて個体の確認はできませんでした。3日の夜間調査ではオス（No.1032）とメス（No.599）を確認しました。

その後、5日に退所し7日に来所しました。到着した時にアンコ淵の出入口の穴から小さな頭が出ていたのですが、反転して中へ入ってしまいました。これもメス？と考えられ

ますが、個体のチェックができませんでした。9日、外出直前にアンコ淵から1個体（オスNo.1033）が出てきたので捕獲してチェックの後に放すとアンコ淵の巣穴に入ってしまったのですが、バトルもなく静穏のままでした。その間に橋の上から見ていた人が白っぽい個体が更に出現して上流へ去ったと言う。用事を済ませて帰ってくると、メス？（No.599）がハンザキ橋下を通過して上流に向かって爬行していくのを見つけて、慌てて河原に降りて追跡し捕獲しました。チェックの後に放してもそのまま上流へと姿を消してしまいました。この個体は今年の4月に簾野地区にて確認されていたものだったのです。

10日、オス2個体（No.927,1032）を確認する。No.927はハンザキ橋直下にある大きなコンクリート片の下に身を潜めたが，しばらく後に黒主がアンコ淵の巣穴を出て急ぎ足で上流に向かいます。コンクリート片に到達するやいなや，頭を突っ込んでアタックするのが確認できました。12日にオス1個体（No.1034）を捕獲する。13日にはアンコ淵の深みから死卵1粒を拾う。卵黄が崩れて全体に白濁しているので、数日前（10日頃か？）の産卵と推測できるものでした。オス個体が穴から急ぎ足で出てきたが、続いて泥だらけの黒主が追いかけるように出現する。狭い穴の中でのドラマが想像される。この日を最後にパーティは終了したようでアンコ淵に静寂が戻ってきました。

今期におけるアンコ淵の出演者たち（♂6個体、♀4個体）

主演は黒主No.977(♂)	全長990ミリである			9月10日	左前肢付根を咬まれて動かさない
No.1031①（♂？）	全長 720ミリ	体重2.35キロ		9月 1日	右後肢第1～3指欠損
No. 976 （♀？）	全長 545ミリ	体重1.20キロ		9月 1日	四肢の指正常
No.1032①（♂？）	全長 620ミリ	体重1.90キロ		9月 3日	尾の付け根に古傷跡
No. 599①（♀？）	全長 795ミリ	体重3.90キロ		9月 3日	四肢の指正常
No.1033 （♂？）	全長 610ミリ	体重1.50キロ		9月 9日	四肢の指正常（オスでは稀）
No. 599②（♀？）		体重3.70キロ		9月 9日	
No. 927①（♂？）	全長 750ミリ	体重2.80キロ		9月10日	右後肢全指欠損、下顎欠損
No.1032②（♂？）				9月10日	
No.1034①（♂？）	全長 720ミリ	体重3.00キロ		9月12日	左前肢全指欠損、右前肢1・2欠
No.1035 （♀？）	全長 660ミリ	体重2.20キロ		9月13日	四肢の指正常
No.1034②（♂？）				9月13日	
No.1032③（♂？）				9月13日	尾に新しい咬傷(3日前には無傷)
No. 927②（♂？）		体重3.20キロ		9月15日	
No.不明 （♀）	死体発見			10月 5日	観察ステーションで骨と卵黄確認

（忙しくてしばらく観察していなかったので、死亡日不明）

それにしても、オスは己の遺伝子を残すために戦い傷つき、それだけに指の欠けている数の多いほど歴戦の勇士と言うことが出来そうだ。

ハンザキ研を彩る花々

日本ハンザキ研究所　研究員・
株式会社ウエスコ大阪支社　安藤　義範

⑵オウレンとバイカオウレン

早春に清楚な白い花を咲かせるキンポウゲ科のオウレン（写真1）とバイカオウレン（写真２以下バイカと略）は、寒々とした時期に春の到来を感じさせてくれます。根茎にベルベリンという黄色のアルカロイドを含み（黄連の由来）整腸や消炎等の薬効を持つことで知られます。オウレンが兵庫県内に広く分布する一方で、バイカの方は豊岡市（日高・但東）朝来市（生野）養父市（八鹿）宍粟市（千種）など標高の高い場所を中心に記録されており、オウレンよりも分布が限られています。その上バイカは生野町黒川では市川沿いの河岸の岩上などに生えており、薬用として栽培されることのあるオウレンよりは出会う機会が少ないかもしれません。

この２種の花や葉の形は大変異なっており、見分けるのは簡単です。花びら（花弁）に見える白色の器官は、学術上は萼片で、花弁は雄しべの付け根に小さく目立たず付いています。オウレンでは萼片が細いのに対して、バイカでは名前に「梅花」を冠するように見栄えのよい幅広い萼片を持っています。またオウレンの葉は細かく切れ込んでいるのに対し、バイカでは５枚の小葉が１セットになって１枚の葉を形作っています（写真３の左がオウレン、右がバイカ）。

・・

動物たちの痕跡①

野生の生き物はヒトを恐れてなかなか私たちの目の前に姿を見せてくれません。環境調査では彼らの痕跡をフィールド・サインとしてフンや足跡、食痕などを探して記録していくそうです。私に分かるのはシカの足跡とフンくらいですが、時に面白い出来事に出くわします。今回はクチベニマイマイ（かたつむり）の足跡を見つけました。ナメクジのようにキラキラ光る粘液の帯が普通かもしれませんが、写真４のような足跡？を撮影したのですが、どうしてこんな跡が付くのでしょうか？　マイマイ狂さんに聞いてみましょう。

写真５は日本特産のイシガメの足跡です。これは、ハンザキ研の前を走る国道と崖の間にある深い溝から出れなくなっていたメスの老生個体のものです。毎朝散歩がてら路上のポイ捨てゴミ拾いとロード・キル死体、クルミやクリ拾いなどをしながら、学校に接する範囲を観察していて見つけたものです。溝には山からの水が僅かに滲みだし落ち葉や枯れ枝でほぼ埋まっていますが、その隙間から亀頭が覗いていました。エサも無さそうな所ですので、まだ居るのかなと見ていましたが、溝の端の泥上に見事な足跡があったのです。脱出を試みつつ右往左往していたのでしょう。数か月も出れないようなので、捕獲して測定しマイクロチップを埋め込んで川へ放しました。放す前に甲羅を磨くとツルツルに輝き見違えるような光沢となりました。

秋の山の幸

今年は山の幸が豊作だったようです。校内に１本だけあるクリは９月の24日から10月４日の間に 500粒程、ハンザキ橋のそばにあるオニグルミは９月12日から10月４日までの間に1000粒と拾いまくりました。あとはアケビですが、河川観察施設の工事で主な蔓が切られて昨年の収穫には遠く及びませんでしたが、新たにミツバアケビの蔓を見つけました。アケビが５葉で実も緑から薄紫に変わると同時に開け身になって、あっと言う間に小動物や小鳥たちに先を越されてしまいます。ミツバの方は赤く色づき鑑賞用にもなりますが、同じように赤い果実なのに開かないのはムベです。

子供の頃には甘味に飢えていたこともあり、アケビやキイチゴ、グミ、クワノミなどを捜し回っては頬張っていたものです。現在では甘味が少ないこれらの木の実はあまり人気が無いようですが、季節の贈り物としてのアケビの存在は揺るがないものだと思います。栽培もされているとのことですが、もっともっと自然の恵みを受け取っていく生活ができればいいのになと思っています。

クルミの方は川岸に大木があり沢の胡桃なのでサワグルミと勝手に思い込んでいたらオニグルミという種だと教えられました。どうも単純な思い込みが多いなと反省しましたが地域の方は、子供のころにはまだ青い実を石に擦り付けて果肉を取り石でたたき割って食べていたそうです。愛知県瀬戸市のオオサンショウウオ調査地では、かぶれるのでさわらないと言って食習慣が無いとのことで、河原に多数の実が流れ着いたままになっていました。身が少なく食用には向かないかもしれませんが、我が２才の孫娘は気に入ったようで早く剝いてくれと催促が急でした。電子レンジで２分ほどチンすると更に香ばしくなります。瀬戸市の皆様も一度試してみてはいかがでしょうか？　カブレについては人によるのかもしれませんが、私は素手で水漬けの実の皮剝きをしてもなんでもありませんでした。

クリは大きな実が食べ応えがあっていいのでしょうが、小さな実を付けるヤマグリのほうが美味しいと思います。薬品も散布していないクリですので、半分くらいはクリムシ？に先を越されていますが、毎朝せっせと拾った分だけうま味が増すように思えます。ネズミやシカなどの動物と競争ですが、彼らの貴重な食料を横取りしていることになるかと考えると、なんとも言いがたいところがあります。クリは場所や木によって早い遅いがあるようですので、校庭に何本か植えておけば長い間楽しめそうであり、動物たちにも分け前をやることが出来そうですし、杉檜の植林地帯ですので落葉広葉樹を少しずつでも増やしていきたいとも考えており、そのうちに実行に移したいと思います。

最後に、今年の新米を地域の方から頂きました。小袋に“御礼”と書かれ生産者のネーム入りの物です。早速おいしくいただきました。手始めの家庭菜園？のアオジソの穂も収穫し満足しており、秋はいいものだと満喫しています。これからもあちこちに目を光らせては競合相手に負けぬようにしたいと考えています。

写真１　オウレン(2007.3.31)

写真２　バイカオウレン(2007.4.1)

写真３　オウレン（左）とバイカ（右）

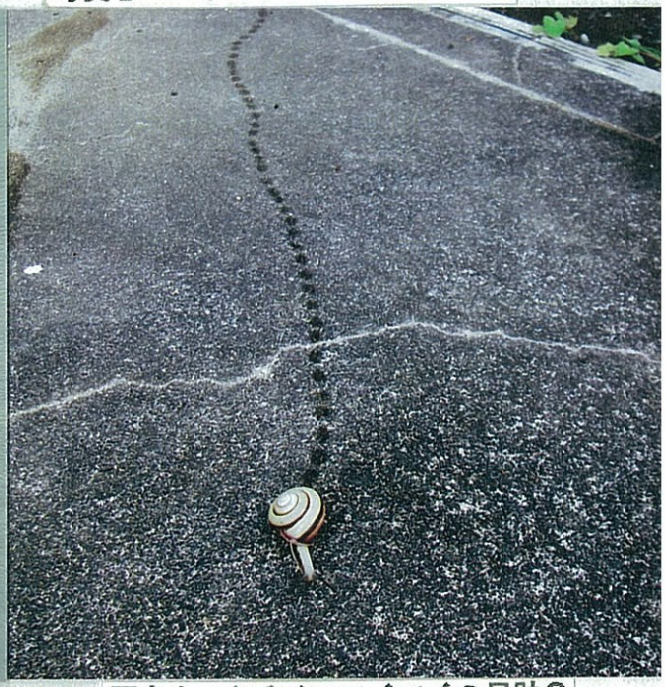

写真４　クチベニマイマイの足跡？

写真５　イシガメの足跡

写真６　山の幸（左オニグルミ、右はクリ、手前がミツバアケビ）

ハンザキ研日誌　2007年9月

1日：8月31日から引き続きオオサンショウウオ調査（GS-246～ 5日）
：夜間調査で先月18日に観察ステーションに初入のNo.1031を近くで再捕
2日：来客にアンコ淵を説明中に、頭出し中の黒主の所へ１個体入巣♀？!!!
：河川におけるアユの網解禁となるが、禁漁区になったので静寂
3日：上水源の受水槽１年半振りに清掃
4日：ハンザキ橋の下にキイロスズメバチの巣発見、バレーボール大
5日：市川水系委員会、兵庫県姫路総合事務所にて
7日：オオサンショウウオ調査(GS-247 ～28日)
：朝来市役所にてＮＰＯ化についてまちづくり推進課に説明
9日：簾野の人工巣穴チェック、昨年の巣に同じオスNo.625 がいたので期待!!
１２日：アンコ淵を訪れるハンザキ多数に振り回される
１３日：アンコ淵の巣穴下流側で死卵１発見、産卵していたのだ！
１５日：鳥取県立博物館副館長安藤夫妻来所
：簾野の人工巣穴不産
１８日：黒川地域活性化協議会、かなり本音で議論できるようになってきたようだ
：簾野下流の吉原堰下で卵を排出中のメスあり、未受精卵標本に
２０日：急激な花粉症始まる、風邪とのダブルパンチ
２３日：「日本ハンザキ研究所」の墨書看板完成、新家さん有り難うございました
：朝来市銀谷（かなや）祭りで25名ずつ２組にレクチャー
：京大・田口勇輝さん主催の「里山の会」６名、来所～２４日
２４日：クリをバケツに３杯収穫す、今年はクルミと共に豊作
２６日：プールのハンザキ保護センター化の工事入札が行われる
２７日：兵庫県豊岡土地改良事務所安國所長他来所
：兵庫県内水面漁業センター土岐所長来所
（今月は2回２７日間の出勤？で、総計２０２人の利用がありました）

ハンザキ所長のツブヤ記録

9月はハンザキの繁殖期であり、昨年もハンザキ橋下のアンコ淵の黒主を巡るバトルでスリリングな光景を見せてもらったのですが、今年はさらに倍もの個体の集合があり大忙しとなりました。やはり、食うことと繁殖の生態は何物にも勝るものだと再確認させられたところです。一方でハンザキ所長は繁殖期は終わりましたが食うことに四苦八苦している所です。料理の勉強をしたこともなく、とにかく何かを食いながら走り回るためのアルコール燃料を取り入れることに専念しております。